

■ 第三話 キツネ憑きの花嫁

■ 1

それにしても、短い川だった。15mも上流に登ると、そこで川は途切れ、水草や葦などが生えた草むらの中に水流が隠れてしまっていた。

「おー、タツちゃん、何ボケくつと立つとるんかいね。ヤマメ探さんと、ヨッコが困るとよ。一生懸命がんばらといかんけん。」

と、話しかけて来たのは、「とつくり」の飲み仲間、ジュン君だった。

「そうばい。ヤマメが取れんかったら、『今日のオススメ』は、無しばい。寂しい晩酌になるべよ。」と、いつもの困り顔で言うのはチンさんだ。

「何言ってるのよ、言つときますけどね、これはアンタ達が飲み代もないって言うから、いままでのツケの穴埋めに肉体労働やつてもらってるって事なんだからね。アンタ達の晩酌が寂しくなるうが、豪勢になろうが知った事じゃないわよ。」と、「とつくり」で雇われ店主をやっているヨッコがチンさんの言葉に訂正を求めた。

「そうやった、そうやった。すまんねえ、苦労かけて。」

「ほんとだわよ。こうでもしなけりや、そうそう回収できないじゃん、あんたたちのツケなんか。なんでわざわざ、客をバイトとして雇わなきゃなんないのか、私の方が唾然とするわよ。」

とその時、良い釣り場を探索に出かけていたマサさんが戻ってきた。

「しかし、おかしかねえ、この川。どこ探しても、上流がないとよ。」

「と不思議そうにつぶやく。」

「そんなことないでしょ。」

「いや、いつの間できとったかいね。山の中に大きな工場ば建つとって、そのの回りをぐるーと回ったけんども、どうもそこから川の水が出てきとるとしか思えんのがや。」

「そんなバカなことあ、ないでしょ。それよりちちゃんと釣りする！はい！」

このメンバーが集まると、いつもにぎやかだ。

と、タツちゃんの耳に、草むらから何か誘うような物音が聞こえた。

「ん？ 何だろう？」とタツちゃんは音の方を見る。何か動いたような気がした。

「ちよつと、タツちゃん、どこ行くのよ？」  
「え？ ああ、いや、ちよつと。すぐ戻るよ。」  
とタツちゃんは草むらの中へと入り込んで行った。  
「ちよつとタツちゃん！ あんたの分のツケ、引かないわよー！ いいの  
ね！」

と、相変わらずよく響く声をヨッコは張り上げた。

☆ ☆ ☆

「ところでヨッコ、見合いの話があるってほんまかいな。」

「誰に聞いたの！」

「いろんなとこばい。福地荘なんか、全員が知ったぎや。」

「えらいとこまで広がってるのね。でも、チンさんだっけいい加減就職しなきゃダメでしょ？ おんなじ事よ。女にとって、結婚は就職みたいなものだつて。」

「なんか割り切つとりやーすねー。そげなもんですたいかね。」

「そげなもんですたいよ。」

☆ ☆ ☆

草むらをかき分けて、2分も歩くと、もう水の流れはなく、いきなり砂地に乗り上げてしまった。

「おかしいなあ。あの川の水は、いったい、どこから流れて来たんだろう？」

不思議に思っていると、目の前を何かの影が隠れようとするかのよう動き、走った。

なんだろう？ と、追いかけていくと、草むらの陰にひとりの少女が立っていた。抜けるように肌が白い。少女はチラリとタツちゃんを見ると、葦の間へと消えてしまった。タツちゃんはなぜだか睨まれたような気がした。

思わせぶりな少女の態度が気になり、タツちゃんはつい、追いかけてしまった。草をかき分けて通り抜けると、大きな壁がタツちゃんの手行く手を塞いだ。どうやら、マサさんが言っていた「工場」の壁らしい。

「なんでこんな大きな工場がこんなところにあるんだろう？」

不思議に思っただけでタツちゃんは壁の回りを歩いてみる。と、その時足の下を流れるものがあつた。

水だ。

どうにも不思議なことに、その水は、工場の床から湧いてきて、表に染み出しているように見えた。広い敷地全体から水が染み出し、そ

れがひとまとまりになって川に流れ込んでいる……というか、この工場こそが、川の「上流」なのだった。  
 どういうこと？、これ。

不思議さにたまらず、タツちゃんは、その工場からあふれ出してくる水をよく見てみた。とてもきれいな、澄み切った水流だった。木漏れ日を受けてキラキラと輝くようだ。

いや、よく見ると、水が反射しているだけではなかった。水の中で、何かが光り、二重に輝きを増しているようだった。目をこらして良く観察して見る。

え？、砂金？、

確かにそれは砂金だった。工場の下から水とともにあふれ出していた。それほど多い量ではなかったが、充分に目で見て分かるほどに、次々と砂金があふれ出てきていた。

なんなんだ？、この工場は？、

タツちゃんは、その不思議な工場の壁に手を当ててみる。かすかに震動を感じた。

トトン、トトン。工場の鼓動のように、それは手に届いた。トトン、トトン。そのリズムが妙に心地よく、タツちゃんは工場の壁に耳をあてて、その音をしっかりと確かめてみた。トドン、トドトンと、少し濁って聞こえる。なぜだかタツちゃんは、懐かしい気持ちになっていた。

■  
2

「タツちゃん、戻ってこんねエ。」

「あれ？ここにタツちゃんの鞆とか置いてなかったっけ？あの青い、宇宙船のマークの入ってた奴。」

「ヨッコ、よー見とるね。そーいやそこにあつたばい。わしもそこに置いていたし。」

「じゃ、タツちゃん、帰っちゃったんじゃなかかね。けっこう、とつぽいとこあるけん。」

「そげだねえ。」

「なんか雲行きも悪かし、そろそろ帰った方がよいかかもよ。」  
 雨が、少し降り始めていた。

☆ ☆ ☆

ふと気付いた時、タツちゃんは工場の中にいた。

「いつのまに？」

不思議に思ったが、そんなことで驚くタツちゃんでもない。

「そーゆーこともある。」と、気を取り直して、中に入る。やたら大きな機械が並んでいる。

ドスンボコン、ドスンボコンと30年前の町工場のような音がしていた。

「誰じゃ。」と、大きな声がした。狐のような顔つきの白髪の老人が立っていた。

「猫みたいなおっちゃんだな。」とタツちゃんは思う。身のこなしが妙にしなやかなのである。

「ここは、立ち入り禁止じゃ。関係者以外は決して入れないようになつとるはずだ。いったいどうやって入り口の警備をくぐり抜けてきたのかね。いったい君は誰なんじゃ。」

一度にふたつも質問されて、タツちゃんは、答えにつまってしまつた。

「え、あ、あの。」と、ついしどろもどろになる。

「いや、実は僕も、どうしてここにいるのか分からないですよ。」

「ん？ なんじゃと？」と、狐顔の老人の口調が詰問調から、少し軟化した。

「いや、この工場の周りが、不思議な感じだったんで、壁の音を聞いてたんですよ。そしたら、気持ちよくなっちゃって、はつと気がついたら、ここに立ってたんです。壁をすり抜け：たのかなあ。」

と、説明になっていない説明をした。

「壁を抜けた？ 君がかね？ うーん。」と、狐老人はわざとらしいくらい驚いた表情になると、急に黙り込んでしまった。かなりショックを受けている、という様子だった。

「ちよつと、こっちへ来なさい。」

ほんの少しの距離を取って、狐老人はタツちゃんを促して歩き出した。やたらと天井の高い、その施設の廊下をタツちゃんは狐老人の後について歩く。照明の数は、あまり多くなく、少し薄暗い。

大きなドアがあり、狐老人は、そのドアを開けた。

そこは、薄暗い廊下とは打って変わって、光り輝く泉の園であった。地下から水が次々とあふれ、その中にキラキラと光るものが舞っていた。砂金だ。

「ここはな、最近になって発見された砂金の泉と言うのだよ。国家機密：とまでは言わんが、それ相応の内緒話なのじゃ。しかし、君の通り抜けの事と言い、この不思議な泉といい、どうにも腑に落ちん。何か空間の歪みでもあるのかもしれない。」と、説明をしていると、後ろから「木曾中先生！」と言う声がかかった。

「ここは、関係者以外、立ち入り禁止ですよ。誰なんですか、その人は。」と狐老人を非難しているようだった。誰なんですか、その人は。タツちゃんはふり返って驚く。なんとヨッコがそこにいた。え？

どういうこと？ タッチちゃんは驚くが、ヨッコはまったく意に介していなかった。というより、タッチちゃんがヨッコであるということに気づいていない。いや、なにより、ヨッコがこんな施設で働いているという話は聞いたことがなかった。

しかし、その「木曾中先生」と呼ばれた狐老人の方が、もっと驚いた顔をしていた。

「なんだね君は。この部屋にどうやって入ってきたんだね。」とヨッコを責める。が、少し落ち着いてきたと見えて、ひとつ二つ深呼吸をすると、ゆっくりと話し始めた。

「いいかい二人とも。落ち着いて聞きなさい。どうもさつきから、この施設をとりまく意識空間に大きな歪みが出てきておるようなのじや。その砂金の泉の水流コントロールで、空間軸も安定するやもしれん、いまから作業をするから、悪いが君たちは、安全のために、そのカプセルの中に入れてくれるか？ そうしないと、この施設の安定性そのものが失われて事故になりかねん。さ、はやく。安全のためじゃ。」と言うがはいか、タッチちゃんもヨッコも透明なカプセルの中へと閉じこめられた。タッチちゃんはヨッコを見るが、ヨッコは不審そうに木曾中先生と呼ばれた狐老人の作業を見ていた。

大きなパネル型の操作盤の前で、木曾中先生は操作をしていた。美しい花の匂いがする。

## ■ 3

タッチちゃんは夢を見た。一面に菜の花の咲く花畑の真ん中にいた。目の前を一匹の猫が通る。シヤム猫のような姿だが、どこか違う。えらく人間くさいのだ。猫はちらつとこちらを見たが、すぐに花の影に隠れた。

どこかで、こんな体験をしたような気がする。

気になって、タッチちゃんは、その花の影へと入り込み、猫を追った。いつの間にか、菜の花は傘代わりにもなる巨大露のような大きなサイズになっていた。菜の花の林の間をタッチちゃんは猫を探し歩く。すると、隣の花影に尻尾が見えたかと思うと、向こうの花影にも前足が見えた。どうも、あたり一帯に、あの人間くさい猫たちがいるよ。うなのだ。

どの猫も同じ雰囲気。一匹ずつは立ち居振る舞いがまったく違うのに、どの猫も同じように人間くさい。そして、みな、いっせいに、ひとつの方向を指して歩いていた。タッチちゃんもまた、その流れに乗って猫たちを追いかけた。

花畑の真ん中には、大きな穴が空いていた。どの猫も、その穴を指していたらしい。猫たちは、その穴に近づくと、フワリ、フワリ

と、空中を舞うかのように、その穴の中に入っていく。  
 気持ちよさそうだな。タツちゃんは、つい微笑んでしまった。  
 フワリ、フワリ。  
 フワリ、フワリ。  
 どうも同じようにフワリができるような気がしてならない。  
 穴をのぞく。  
 穴はあった。そして深い。底は見えない。  
 入り込んでしまった。  
 フワリである。

■ 4

ドドドドドン、ドドドドドンと、けっこう大きな音がしていた。どうやら、ドアを叩く音のようだ。いったいどのドア？ 「あ、僕の部屋のドア」と気づいてタツちゃんは目を覚ました。なぜか、自分の部屋に戻っていた。

「タツちゃん、タツちゃん、いてるんね？ 昨日はどげんしたとかばい？」

と、チンさんの声がする。ドアを開けなくても、困ってるような焦ってるような、いつものチンさんの顔がわかるような気がした。

「あ、起きてますよ。だいじょーぶです。」と、とにかく返事をする。

「そげかいね。ならよかバイ。そろそろ授業がはじまるけん、わしやもう行くぜよ。」とチンさんは、かなり焦っている。

「帰るなら帰ると言うときんさいばってん。いつのまにか荷物がなくなつとるけん、どげしたかなと、みなで心配しとったんやき。そしてらな。」と、階段を駆け下りる音がした。

「講義か。今日は火曜日。ヤバイ！」タツちゃんも遅れる訳にはいかない授業のある日だった。単位を落としかねない。

青い宇宙船のマークが入ったカバンを肩からかけると、タツちゃんもあわてて部屋を飛び出した。

☆ ☆ ☆

第二講堂には、めずらしくヨッコがいた。

「どうしたんすか、ヨッコさんが授業に出るなんてめずらしい。」  
 「そんな事どうでもいいでしょ。それよりどうして昨日は先に帰っちゃったの。せつかくの収穫だったのに、酒盛りにも出ないで。」

「え？ あ、ああ。」

オカシイ。ナンダカヘンダ。という声が頭の中で聞こえた。昨日、

工場で会った人はやっぱり別人？ どうしてこう、不安な感じがするのだろう。大抵のことには動じないタツちゃんだというのに。  
「次、木曾中先生の授業よ、ちゃんと出席取るからね、あの先生。出とかないとまずいよ。」

「そうだ。確かに、木曾中先生の授業だ。出席をキチンと取るから、出とかないとまずい。」

でも、木曾中先生って誰だ？ そんな先生、もともといたっけ？  
で、どうして僕はその先生の授業を受けなくちゃいけないんだ？ なんだかいまひとつ確信が得られない。

こんな時、確か誰かが助けてくれたような気がしたのだが、どうにもうまく思い出せなかった。

☆ ☆ ☆

「とまあ、宇宙の寿命は、つい先日尽きたと、こういうことになる訳である。つい先日尽きたのに、なぜまだ君たちが生きているかという点、その寿命が尽きた地点が、ここから何千億光年もの距離を持っているからなのである。わかるかねえ？ わからないでも、わかった事にしなさい。かように、この宇宙は想像以上に広い。」  
老人の風体をしている割には良く通る声で「木曾中先生』は話し続けています。」

「宇宙には、この尽きた寿命の隙間を何分割にも割って、生活している種族もおる。たとえば、辺境の猫族として名高いスアミイ族が、その代表じゃろう。」

彼らスアミイ族は大地を大規模に掘る能力を持っておる。それだけなら単なるモグラと変わらんが、彼らの素晴らしいところは、その穴掘りの深さを時間に変換し、そして、掘り進んだ時間を空間へと変換する能力を持っておる事なのじゃ。

ガマの油売りの口上のように、良く切れる刀は一枚の紙を二枚に、二枚が四枚にと、面積は小さくなるが、枚数は次々に大きくなっていくもの。そのように、穴の深さは、物理的な時間に変換されていく。そんな不思議な能力がスアミイ族には備わっていると言ふことなのじゃ。

スアミイ族は、そのキツネにもネコにも見える姿から、時空を掘るキツネコという呼び名があるくらいでな。

彼らの星は、この地球から何千億光年も離れておるが、その星の地下を、どんどん掘り進むことで空間を超え、時間を超え、この地球にもやってきているという事じゃ。

宇宙の最後の時までを、何万分割にも割り込んで、半分の半分に分

り続けることで、何千億光年もの時間を逆戻りしてワープして、それでやっと生きながらえておる。

彼らの祖先は、ついさつき、最後の一匹が死におった。地球から見れば、何千億光年もの未来の話じゃがな。彼らにとってはついさつきの未来なのじゃ。絶滅を知りながら、そこから逆戻りをし続けて、生きながらえているのが彼らスアミイ族。

彼らの親、つまり逆時間関数内における子孫ということになるがの、彼らは時間の隙間を掘り続けることで種の保存をしておるわけじゃ。

彼らは少なくとも、時空の穴を掘り続けてさえおれば、この宇宙の終わりの時がやってきたとしても、死に絶えることはない。まさに宇宙空間を駆け抜ける永遠の命。しかも時空間移動をとまなう穴掘りじゃからの。さまざまな星へ旅して少しづつでもエサを確保することもできるのじゃ。彼らの星は、全宇宙消滅の、ちようど周縁部分に位置するでな。ほんさつき、何千億光年を越える距離と時間の彼方で、この宇宙から消え去りおったのだ。」

なんて気の遠くなるような話だろう。あまりに、僕には関係がない。確かに関係ないよね。」

え？

隣にいた学生がつぶやいていた。抜けるように肌が白い、あまり見かけない女子だった。いや、どこかで見たような気もする。

「スアミイ族は、可哀想だわ。だって、一生穴掘り人生のままじゃないの。誰か新人類が『私が救世主になりました』と首をタテにふつたら宇宙の寿命も尽きることはないのにね。」

と、何故か白い肌の女子は脅すような恐ろしい目で、タツちゃんをにらんだ。タツちゃんは少し気持が萎えた。新人類って言うのはボクの事？ ボクのせいで宇宙は破滅するの？ 消え入りたくなるような気持になった。空間が狭く感じられ、少し温度が下がったような気がする。

「ねえ、穴掘り人生って何の話？」

と、その時、ヨッコが話に割り込んできた。

「い、いや、なんでもないよ。」とやつとタツちゃんは答える事ができた。

「ちなみに猫に小判と言うことわざがある。」と、急に木曾中先生の声が大きくなった。なんの話だろう？ 「辺境の猫族、スアミイたちのエサは砂金という話だからね。猫に砂金、妙に符号する言い回しじゃな。さ、今日はここまで。」とわけのわからない結論をつけて、木曾中先生は教壇から降りていった。

横を見ると、さっきの色白の女子の姿は、もうなかった。

■ 5

フタタビ山の山頂は天気良かった。あまりにおかしな事が続いて、タツちゃんも頭が混乱してしまった。こんな時は、ここにくるの  
がいい。

山の裾野の一部がうずたかくなっているこのあたりを、近所の人たちは「フタタビ山」と呼んでいる。本当は正しい山脈名があるのだから、タツちゃんにとってフタタビ山はフタタビ山だ。

「あそこに、確かに工場はあるよなあ。」とタツちゃんは、真正面の山の影に顔を出している、昨日の工場をながめていた。

何かがすごくオカシイのだけれど、周りはいつものように動いている。いや、もう何年も授業に出ていないヨッコさんが授業に出てきたっていうのはいつも通りじゃないな。でも、昨日はヨッコさんは、まるであの工場の職員のようにだったし…。

こう言うとき、確か誰か、上手に答えを教えてくださいる人がいたはずなんだけれど、いったい誰だったわけ？

いや、人…か？

あ、そうだ！ 宇宙人、宙公だ！

と、タツちゃんが思いだしたその時、声が聞こえた。

「やっと、思いだしてくれたぎゃーすか。けっこう苦労したはりまして、ばってんよ。」

と、懐かしい来産語の声が聞こえた。目の前の岩陰から、ニユツと、宇宙人としか言いようのない、その顔が現れた。

「宙公！」

■ 6

「いやあ、まいったがね。とにかくタツちゃんに連絡取ろうと思ってたのに、全然タツちゃん、ワシの事に気付いとりやせんけえ。大阪にいた頃も、かなり個体反応度が低かったけん、また一層反応度が下がったんかと思つて、逆に催眠バリア張つて、わしを人間と思わせて近づこうかと思たんやぎゃ、それもうまくいかんとよ。どーなつとるんやと、かなりあせりまくりやつたがね。何回もこつちから声をかけてるのに、全然気付かんし、何をやってもアカン。ずっと横におつたつちゆうに。」

空を雲が流れている、宙公とタツちゃんはフタタビ山の草むらに寝転がって空を見ながら話をしていた。

「えー、そうなんだ。なんでまたそんなに焦ってるの。」

「いやー、星へ帰ったンやが、上司がより一層のご立腹やったけん。なんか、やっぱり、この地球に上位レベルの生命体になれる、宇宙の救世主がおるっちゅうのがはつきりしてきてるらしいんよ。そやさけ、やっぱりタツちゃんんと違うか？ 言う事になつて、ワシが逆戻りしてきて、またタツちゃんに連絡取ることになったんよ。」

「えー、やだなあ。サイコワープしてダメだったんだから、しょうがないよ。」

とタツちゃんは、あからさまに嫌な顔をした。

「ところでさ、宙公。」

「なんね。」

「ちよつと最近おかしいんだ。」と、タツちゃんは、この数日の出来事を、かいつまんで説明した。

「んん？ いまスアミイ族っちゅうたかね？ タツちゃん。」

「うん、そう言ってたよ。」

「スアミイ族の事を知ってるっちゃあ、やっぱり地球の人間やなかばい。それに、ワシもくわしゅうは知らんかばつてん、スアミイ族が空間移動する時に、ハマイヒラ、地球の言葉で言う金が発生するというのは、聞いたとるけどなあ。どげ、なつとるんかいのお。」

「宙公でも、わかんないことがあるのか。」

「そりやそうだわね。宇宙は広いけん。けんども、スアミイ族のような辺境の、宇宙の崩壊地点に近い場所から、地球みたいに、まだまだ崩壊の危機がやってきとらん、こげなところまでスアミイ族がくるなんちゃあ、おかしな事があるもんかのお。」

「そういう距離関係なんだ。」

「いやまあ、距離は関係ないっちゃ、関係なかけどね。たとえば、タツちゃんに子供がおつて、何光年も彼方に宇宙船で移動したとする。」

「うん。」

「で、着いた先の星で子供を作つたとして、それをタツちゃんに知らせようと宇宙船で移動したら、光の速度でも何年もかかるんじゃわ。」

「ほうほう。」

「でも、『意味』の上では、タツちゃんの息子に子供が出来た瞬間に、タツちゃんはいいさんになつとるわけや。」

「そりやそうだ。」

「つまり、意味の上では距離は関係ないわけよ。ほんでや。地球の文明では物理移動にしか発想が向いとらんけど、広い宇宙には意味と論理の通り道つちゅうのがあつてやな、スアミイ族みたいに時空間変換能力を持つてるような種族は、その通り道を抜けてくることができるらしいんやわ。太陽から出る放射線、太陽風と、恒星間引力の隙間に

磁場の歪みがあつて、そこは意味と論理だけが行き交う潮の流れになつとるんやちや。そこを時間と空間を相互に入れ替えながら移動すれば、瞬時に近い速度で星と星の間は行き来できるらしいから。そやから、距離が遠いとかなんとかやなくて、なんでそんな星の消滅が近いような種族が、わざわざ地球までやってきてるのか意味がわからんから不思議、つちゆう話や。」

「へえー。でも、宙公はどうやってここまで来てるのさ。」  
 「あー、ワシは、物理的に来てるんと違うがな。その意識の流れに意識だけつないでるんよ。もともとの体は本星にあるわいな。」

「え？ そうだったの？ 実際に、ここにいてるみたいだけど。」  
 「いや、来てるワシも、自由に動けるし、実際に地球に来てるような感じなんやけどな。しかし、物理移動となると、けっこう大変なことやしのお。しかし、スアミイがこの星におるつちゆうは、何にしる、おかしな話。うむ。そうじゃけなあ、ちいとガレンに問い合わせて見るべ。」

「何、ガレンって。」

「河に連なると書いて河連。銀河連邦の事じゃ。わしらの言葉では別の呼び名じゃけども、ちよつと地球風に言ってみたんじゃい。まあ、ちよつと上のもんに確認して、調べてみるわね。しーたらな。」  
 宙公は、立ち上がるのと岩陰に隠れた。どこに行ったのかと裏を見てみたが、もう姿はなかった。

「んー、しかし、ガレンってのは、ちよつとどうかと思うけどなあ。」

「とタツちゃんはずぶやいた。」

■ 7

その夜、かなり遅く。「とっくり」は、もう看板の灯を落し、ヨッコとジュンくんだけが、店に残っていた。

ヨッコはコップなどの片付けをしている。ジュン君は少し残った酒を飲み終えようというところだ。

「いいのかい。ほんとに見合いかして。」

「いいのよ。もう、決めたんだから。」

「この店は？」

「やめる。」

「大学は？」

「やめる。」

それから、ジュンくんは、何か言いたげにヨッコを見たが、少し口をつぐんだ。

「でも、いいのか。ほんとに。」

と、また同じ事を聞く。

「何がよ。」  
 「俺に言わせるのかよ。…タツちゃんだよ。」  
 ヨッコは口をつぐむ。  
 「俺にはわかるからな。『あこがれの人』。あれ、タツちゃんだろ。」

「ヨッコは横を向いた。」  
 「…まあいい。どっちにしろ、俺はおいてけぼりだ。」  
 「…ごめんなさい。」  
 「とつくり」と筆文字の入った、目印の大きな木看板が、表で風に揺れた。

■ 8

少し元気が出た。宙公と会々と、いつもそうだ。あいつにはウソがない。

「もう一度、あの工場を確かめてみよう」とタツちゃんは思っ、また川を登っていた。

が、川はどこまでも川のままだ。あの工場はどこだろう。と、見覚えのある葦の原に出た。

「ああ、ここだ。」と思う。

川から出て、少し歩くと確かにその「工場」はあった。が、それは本当に古工場で人の気配もしない廃屋だった。

「なにしとるんじゃ」とタツちゃんは呼び止められた。ふり返ると、地元の農家の人らしき老人が立っていた。どこかで見たような顔。

「あ、木曾中先生。」

「ん？ わしや、山中じゃが、どこかで会ったかいね。」

「あ、いや、すんません、勘違いです。」

「いや、ここはもう、長年廃屋でな、別に中ば、入ろうがどげんしようがかまわんが、キツネがけっこう出入りしとるでな、隠れ家に穴ば掘ったるとしよるけん、あぶななかよ。気いつけんさいね。」

と、それだけ言うと、山中さんは、もと来た道へと戻った。

「キツネの穴か。」とタツちゃんは気になり、廃屋を見る。壁が崩れて、中への出入りも自由にできるようだ。壁の向こうは草が生え放題になっている。少し中に入ると、確かにそこに穴はあった。

「これかあ。」と妙に感心していると、突然、後ろから誰かに背中を押された。

「うわっ」

タツちゃんはバランスを大きく崩して、深い穴の中へと落ちた。

☆ ☆ ☆

闇の中に、その女は立っていた。あの色白の少女だった。タツちゃんは意識を失って、そこに倒れていた。

「今宵こそ、救い主に、してやろうぞ。」

少女はタツちゃんの顔をのぞきこんだ。

「二回も邪魔が入ったからのお。今度こそ、洗脳してでも我らが種族、救ってもらおうぞ。」

少女は、タツちゃんの頭に手をかざすと、何事かをつぶやき始めた。

「わが母星の近宇宙から、宇宙の崩壊が始まって、一億年。いく度もの意識の道の移動を繰り返し、我は宇宙の端から端までを行き来した。わが母星の崩壊を防ぐ方法はないものか？ この宇宙を救えるものはおらぬのか？ その答えはお主にある。お主は、この宇宙の救い主。正しく意識を開くが良い。」

少女の手の先はほのかに光りはじめ、タツちゃんのおでこの上で輝きを放ち始めた。

「ウニクサラ、アマドウラ。ユネイドウラ、サラステル。ハイネイスリク、ユニケトラ。」呪文を唱え、あたりに独特の障気がただよい始めた。

■ 9

タツちゃんは意識の道を歩いていった。何匹ものキツネが、穴を掘っている。少し鼻の長いネコにも見える。彼らがスアミイ族なのだろう。

掘った所は穴ができるはずだが、決して穴は広がらない。掘るたびに、キツネの爪の先から、何か粉のようなものが出る。砂金だ。砂金が空中に舞い、輝いている。

キツネには尻尾がいくつもあつた。二本のもの、五本のもの、もつと多いもの。何やら必死になつて掘っている。輝くような洞窟だつた。

タツちゃんは、その洞窟を、一歩ずつ歩いていく。どこまでも続く金色の洞窟。キツネたちは、チラリとタツちゃんを見るが、すぐにまた自分の作業に戻る。とにかく必死に穴を掘っている。決して作業は中断させないし、止めてはならない事のようにだつた。

洞窟は歩くたびに何度か何度も枝分かれしていた。タツちゃんから見て、左右にも、上下にも、あらゆる方向に枝分かれしていた。重力がどうなっているのかわからないけれど、この空間に上下の区別はなく、壁は地面であり、見上げた場所が天井だつた。地面||壁||天井は、すべてキツネの穴掘りの場であり、歩けるところなら、どこへで

も、どこまでも行けるようだ。壁と言う壁、地面と言う地面、天井と  
言う天井すべてで、キツネたちが穴掘りをしている。

歩いているうちに、洞窟の大動脈とも思える、巨大な地下道へと出  
た。タツちゃんらは、思わず自分にとっての「天井」を見上げた。何十  
メートルもの上空の「天井」に、何千匹ものキツネが張り付いて穴を  
掘っていた。

タツちゃんから見えて少し右に、巨大な「壁」があり、そこがこの洞  
窟の一方の行き止まりのようだった。

右を向いていたタツちゃんは、今度は逆に左を向いてその巨大地下  
道の反対側の端を確かめようとした。しかし、巨大な洞窟は、どこま  
でも、どこまでも、続いていった。えんえんと、パイプの内側すべて  
に、キツネが張り付き、穴掘りをしている。巨大な洞窟は、その端す  
から見えない。この巨大洞窟が、どれほどの広がりがあるのか、想像も  
つかなかった。

☆ ☆ ☆

と、その時、なにやら大きな音がした。巨大洞窟の行き止まりの「  
壁」で、キツネたちが、いつせいにジャンプして、「壁」を蹴ってい  
る音だった。

何語かわからない言葉で声をかけあい、タイミングをあわせて飛び  
上がると、何千匹ものキツネが、強い力で同時に地面を蹴った。する  
と、大きな地響きとともに、壁は崩れ、金色の砂金となって飛び散つ  
た。その向こう側には、突然、光の壁が現れた。とても明るけれ  
ど、まぶしくはない優しい光。そして、穴を空けた何千ものキツネた  
ちは、その光の中に吸い込まれていった。他のキツネたちも、次々に  
その光の中へ、フワリ、フワリと飛び込んで行く。

「ああ、あれが意識の流れという奴なんだな。」とタツちゃんはなん  
となく思う。

と、タツちゃんの近くで、何匹かのキツネが、小部屋ほどの大きさ  
のクレーターのような凹みに潜り込んでいくのが見えた。「何かな  
？」と思ったタツちゃんは、自分もその凹みに潜り込んでみる。

中に入ると、凹みの壁は地面全体が透明に透けて見えるガラスのよ  
うな素材で張り巡らされ、まるで、展望台のような作りになってい  
る。

「ガラス」の外には大地があるのでなく、大宇宙の光景が広がっ  
ていた。どうやら、タツちゃんがいる、「洞窟」は、スアミイ達が、  
宇宙空間を「掘って」出来上がった空間であるらしい。

この洞窟は、外から見れば宇宙に浮いた管のような構造で、この展  
望台からはその「管」洞窟の外壁を観察できるようなようになってい

けだ。

まっくらな宇宙空間を、巨大なパイプがどこまでもどこまでも配管されている。キツネたちは、この展望台から、自分達がいる「パイプ」を、外側から観察しているようだ。

パイプは宇宙空間全体に何本も広がり、それぞれの太い幹の先は、ところどころで途切れて、その先が光っている。さっきの光の開通部分だろう。その光の中に飛び込んでいくキツネたちが見える。光の中で、キツネ達の姿は消え、洞窟から、どこへ行ったのかはわからない。

おそらく、光は、意識の流れ、異空間への接続点なのだろう。パイプを幹とし、その先が光る姿はまるで、宇宙全体に広がる巨木と花のように見えた。

タツちゃんは見るともなく、より太い幹へ、太い幹へと視線を辿らせて眺めていたが、あらゆる洞窟の幹の集合点は、より太い幹となつて、一つの星から「生えて」いるのが分かった。

「あの、洞穴の始まりにある星が、我がスアミイ星なのじゃ。」と、誰かがの説明する声が聞こえた。なんだか木曾中先生の声に似ていた。

ふと横を見るとタツちゃんの横に小さなネコのようなキツネがタツちゃんと並んで、透明な展望台から外を見ている。

「ぬしが、宇宙の救世主になることを拒否した極悪人か。」と、そのキツネは、タツちゃんに問いかけた。

「我が名はスエン。スアミイの中心となるもの。おぬし、なぜに世界を破滅に導く？」と、強い調子で問いかけてきた。

■  
10

「君は……。あの川の上流で見かけた女の子だね？」とタツちゃんはなぜか、それがわかった。

「そうじゃ。いまは、ぬしの頭の中に、直接話しかけておる。ぬしはどうにも意識の導きが通じぬでな。」

「なに？ 意識の導きって言うのは。」

「この宇宙の消滅を救う導きじゃ！」と、スエンと名乗った宇宙キツネは強い口調で言い放った。

「見てみよ！ あの、宇宙滅『虚無の闇』のはびこりようを！ あれは、われらが宇宙を、延々浸食し続けておるのじゃぞ。」と、スエンは足下に見える、スアミイ星の方角を指さした。

「え？ あれは、スアミイ星なんじゃないの？」とタツちゃんは少し混乱した。

「違うわ。愚か者が。我が母星ははぼしの向こう側にある、巨大な宇宙滅が見

えぬのか！」と責めるような口調でスエンはタツちゃんの勘違いを叱責した。

「タツちゃんは目をこらしてスアミイ星を見る。」

「よく見るがいい。わが母星より向こう側には星があるまい。すべて宇宙滅に食われてしまうたのじゃ。」

確かに、スアミイ星の向こう側には星の輝きはなかった。ただ、うつろな闇だけがある。よく見れば、スアミイ星の周りは、かなりの広範囲にわたって、星の輝きがまったくなかった。

タツちゃんは目をこらす。宇宙のどこにも星の姿はなく、あるのはただ、スアミイたちが掘り続けている意識の道と、その幹の先のわずかな光だけだった。パイプのつながりが木に見えていたのは、その背景に星がまったくといって良いほど存在しないからだだった。パイプの木は、まったくの闇の中に浮かんでいたのだ。

「そ、そんな。」とタツちゃんは驚いて、宇宙のありとあらゆる方角を確かめる。星が見えるのは、わずかに意識の道の目の向こう側の空域だけだった。見える範囲の半分にも満たない。天空の大部分が闇に覆われていたのだ。

「よく見よ。あのスアミイとて、すでに『虚無の闇』に食われておるのじゃ。見えているのは一部にしか過ぎぬ。我が母星があんなに小さき星であるものか。」

と、スエンは手を前に出し、穴を掘る動作を、映像の逆回しにしたように動かした。すると、時が動き、スアミイ星の消滅が進んだ。より一層スアミイ星は小さく見えた。それはつまり、球体が黒い海に沈んでいるのと同じ状態だと、タツちゃんは、やっとわかった。見えていたのは、巨大な球体の沈んでいない一部だけだったのだ。

「あああああ」と、急激にタツちゃんは恐怖を感じた。スアミイという星が「沈んだ」のは、それだけ大きな『闇』がそこにあるからだ。それは、あまりに大きかった。そして、自分がまさに、巨大な『虚無の闇』という絶望の淵に立っていることを、その最前線に立たされて、理解したのだ。宇宙滅の恐ろしさは圧倒的だった。

しかし、スエンは逆掘りの動作を止めずに、もっと時を進めた。宇宙滅の中にみるみるスアミイ星は飲み込まれて行き、やがて、まったく見えなくなってしまった。

瞬間、スアミイ一族の恐怖と悲しさの感情が、タツちゃんの心の中に入り込んできた。自分の帰る場所の喪失感。自宅が倒壊してしまつたような感覚。海の上で乗っている船が沈んでいくような恐怖。夢の中で足を踏み外したときのような、永遠に落ち続けてしまう理不尽さ。何億という数の感情がタツちゃんをさいなんだ。

「う、うううう。」

「タツちゃんは圧倒的な感情の波に責め立てられて、声も出なかつた。スエンが強い口調で話し始める。」

「いま見える、わが母星は50年前の姿。我が母星消滅の地点から、われらはずっと、この意識の穴を掘り続け、時間の流れに逆らって、おぬしが味わっておる恐怖から逃れようとし続けてきた。穴を掘り続ける事で、なんとかあの星をなげえさせておるのじゃ。」

爪の間を血だらけにし、繰り返す紙一枚分の厚みとて進まぬ大地を掘り尽くし、時間と空間を超えてきた。

掘った空間は時間と空間に変わり、掘った時間は結果として、全宇宙の生きとし生けるものすべてに分け与えられたというに、我が種族、スアミイ族は、何百億もの個体が、ただこの意識の道で永遠に穴を掘り続けるばかりじゃ。

ぬしらは、我らが血の苦しみの上に未来の安寧を築いておるのじゃぞ。その恨みの深さ、わかっておるのか。」

タツちゃんは、言いしれぬ申し訳なきの中で苦しみ続けていた。

■  
11

「タツちゃん、起きや！ 起きるんや！」

精神が静止してしまつたかのような、やりきれない気持ちのまま、タツちゃんは、誰かが遠くから呼んでいる声に気付いた。

寝ているのか？ いや、それとも、どこかを旅していたのか。移り変わって行く意識の中で、徐々に目を覚ますと、さっきの工場跡の穴の中で、少女が何か呪文を唱えていた。タツちゃんは、まだ申し訳ない気持ちの中で何を成すでもなく、ただ落ち込んでいた。

声の主は、宙公だった。少し離れた場所から、まだ大声でタツちゃんを起こそうとしている。その大声に、少女も驚きの表情で宙公の方をにらみつけていた。

宙公が少女に話しかけた。

「スアミイのものよ。何故に、こげなところにおわっしやる。有文化星域への時空変換航法は慎重に行うべしと言われとるはず。ましてや、地域星民への意識操作は、重大なる宇宙令律への侵犯ですじゃぞ。我らが慈愛の王、グエラルント様も、それをお許しにはなりませんじゃ。」

宙公の姿をまじまじと眺めると、少女は急に「なんだ」という表情になつて、少しバカにしたように言い方で宙公に話しかけた。

「誰かと思えば、ユルイスナのものか。たかが、グウアリンの監察官ごときが、スアミイのなすことに文句をつけようと言うのか。」  
「ええ。たかが監察官でも、律は律。宇宙存亡の危機に、律を犯すは宇宙均整への過振動ではごじやります。見逃すわけにはいかんとです。」

「はい。」ときっぱり言うと、宙公は見えない空間から大砲のような銃器を取り出した。

「そ、それはハーレンシー砲。意識通信での活用をするなどと！」

「ええ、そうでごわんど。スアミイと聞いて、とりあえず上司に許可を得て来もうした。」

「く。力ずくかえ。おぬし、何もわかっておらんと見えるな。」とスエンは宙公を冷たい目で、見下したように言う。

「ど、どういうことでおますか。」と宙公は少しひるむ。

「この地球のものは、800メガリの力をもつとるのじゃぞ！」

「は、800メガリ……。そ、そんなアホな。タツちゃんにそげな潜在力があるなんちゃ……。何を証拠に！」と、その言葉に宙公が驚く。

「だから、たかがグウアリエレンの監察官じゃというのじゃ。スアミイ星は、宇宙消滅への防壁星。ぬしがごとき下っ端には伝わらん情報も、現場の辺境星には、王族警護隊からの情報として、直接連絡が来るのじゃ。」

この宇宙が消滅しようと言う時に、たったひとりで800メガリもその力を持つこの者が、新人類にも、救世主にもなろうとしておらんぞ。

地球のものよ、どうしてもお主には、ヒトバシラとなりて、その肉体を捨て、宇宙を救う意志となってもらわねばならぬのじゃ。」

と、叫ぶと、さつきから光り続けている手のひらを、高く差し上げてタツちゃんに光を放とうとした。

そのとき、より大きな光が、少女の姿のスエンめがけてぶつかり、スエンは洞穴の壁へとはじき飛ばされた。宙公がハーレンシー砲を放ったのだった。宙公はすばやくタツちゃんに近寄り、抱え上げる。

壁際には少女の姿ではなく、キツネとネコのあいこのような姿をしたスエンがうずくまっていた。尻尾は3本。時空を掘るキツネコとしては、どちらかといえバネコに近い。

「うぐぐぐ、本当に砲を放つとは。なんとということをする。」

宙公は、その隙にタツちゃんを抱えて、空中に浮かび上がり、一気に縦穴を空中へと舞い上がった。グウアリエレンの監察官。「スエン

もおのれ。逃がしてなるものか。グウアリエレンの監察官。」スエンも追いかけるように穴を飛び出す。

タツちゃんをかかえた宙公と、スエンの空中戦になった。

空を飛びながら、タツちゃんは少しずつ、いつものタツちゃんらしいゆとりを取り戻しつつあった。

「宙公、いま気づいたんだけど。」

「なんね。」

「あの、グウアリエレンって、もしかして『ガレン』の事なわけ？」

「いま、こげに大変な場面で、そこに気づかんでもよかじやる！」

空を飛ぶ宙公を、どこまでもスエンが追ってきていた。

タツちゃんは、意識の道の中での出来事を思い出していた。確かに、それはスエンによる意識操作だったかも知れない。けれど、あれだけの多くのスアミイたちが、永遠に穴を掘り続けなければならぬのだ、という事を考えれば、まったく無視するという訳にもいかないようにタツちゃんは思えてきた。自分が宇宙を救う救世主なのかどうかは解らない。けれど、自分にできる事があるなら、少しくらいなら何かしたっていいのかも知れない。

「ねえ、宙公、もういいよ。ちよつとスエンと話そう。」

「え？ スエンって、あのスアミアン、スエンっちゅう名前なん？」

「なんかどつかで聞いたようなするがや：。」

「なんか、『スアミイの中心となるもの』とか言ってたよ。」

「わっ、それ、スアミイ様じゃ。えええええ、そげな人なんかいい？ ばってんばい。」

「ちよつと、来産語がおかしくなってるよ。そんなにエライ人なの？」

「そらもう、すごかばい。スアミイ族は、もともと識域下結節の強かごたる種族で、自己と他己のいたりきたりが無理なくできる種族じゃき、種族としての全体人格があるんばい。その全体人格の憑り代よりしろとなる個体があると聞いた事があるばい。それが確かスエなんとかじゃった。」

「じゃ、スエンってエライんだ。」

「エライとかなんとかなかよ。中心となるものは、種族全体の代表であり、種族の意志であり、国家代表であり、王であり、そういう事を全部ひつくるめた存在やけね。」

「なら、なおさらいいじゃん、話をしようよ。」

「なな、何言うてるんかいね。あいつは、タツちゃんを洗脳しようとしてたんよ？ それは、宇宙律への重大侵犯やき、そんな事をさせるわけにはいかんちゃ。」

「そんなかたい事はどうでもいいよ。あのスエンって、そう悪い宇宙人には思えないんだ。ちよつと止めて。」

「タクシーみたいに言いなや。しかし、そこまでタツちゃんが言うなら、止めるしかなかね。」

「と言って、タツちゃんと宙公は、空中でタクシーが止まるかのように急速に速度を落として停止した。」

「ねえ、スエン。ちよつと話し合おうよ。」とタツちゃんはスエンに

話しかけた。

「覚悟を決めたかや、地球のものよ。」とスエンも停止する。宙公は銃でスエンを狙いながら、抱えていたタツちゃんをゆつくりと空中に「置い」た。宙公が手をかざして、空中に浮かせている。

「ス、スエン様、おはんはスアミイの中心たるスエン様とお聞きし申した。」と、宙公はおそろおそろしやべりはじめた。

「タツちゃんがなんや話しがあるとかやから止まりましたが、いくらあなたが、スアミイの長と言えども、いや、だからこそ、宇宙律を守らず異文化の星人を律に反して洗脳なされしは、銀河の重罪、監察官として、ただではおきませんぞ。」

と、宙公はハーレンシー砲をスエンの方に向けた。

「ふふん。何を言うか。我らがこの星に着く時、少し時間を早めて一万年ほど前に到着したのじゃ。たかがこんな遅れた種族との交流、一万年もあれば、十分に果たされておる。キツネ憑き、キツネの嫁入り、稲荷神社、すべてわしらが文化との交流の証。この地に『幻覚』の代表者として歴史に根付いておるのじゃ。すでに同化した文化間での干渉は宇宙律には違反せんわ。」

「うぐ、な、なんと、用意周到な。」宙公は反論できなかつた。

「さあ、さつさと、その者をこちらに引き渡せ。それともさつきのようにハーレンシーを打ちつけてくるかえ？ スアミイの中心たる我を法なく打ちつけるは、ユルイスナからスアミイへの宣戦布告ということになるが、それでも良いのかえ？」

「あわわわ、いやいやいや、そそそげなことは、めめめつそうもなかです。考えてもおらんですけん、許してつかあさい。」

と、宙公は突然にあわてふためいて、大きな銃を見えない空間のどこかにしまいこんでしまった。

「2人の話は、もう済んだ？ 話があるのは、僕の方なんです。」と、やつとタツちゃんが話に割って入った。

「そなた、やつと宇宙を救う気になったのじゃな。では、この金色の御光の供物になるが良いぞ。」と、スエンは笑いながら、また手のひらの光を、大きく光らせた。

「いや供物になんかならないよ。」とタツちゃんは、それを否定する。

「な、なんじゃと？」

スエンは、手のひらの光を、より一層強めた。

「僕は、救世主になんかなる気はない。それをはつきりと伝えたくて、宙公に止まってもらったんだ。」

「お、お主、この宇宙を滅ぼすつもりか！」スエンの光は、手から、体全体に広がる。

「うん、それでいいと思う。」

「こ、ここ、このおそれも知らぬ、宇宙の土俗種族が。ぬしのわがままで、この宇宙を滅ぼすと言うのか。」

スエンの光は、あたり一帯を包み込み、体全体から金色の妖気を放ち始めた。タツちゃんも、その光に飲み込まれていく。

スエンの光は一族の怒りと一体になって、あたり全体を黒雲のような空間に変化させていた。

暗雲の中で、それでもタツちゃんはスエンに話しかけた。

「ねえ、スエン。わがままじゃダメなのかな？ 自分のわがままで宇宙全体が潰れても僕はいいと思ってるよ。」

「な、何を言う！」

と、スエンが驚き、暗雲はタツちゃんの言葉に反応して、にわかにも雨を降らせ始めた。

「ちよ、ちよっと待ちいや、タツちゃん。いくらなんでも『宇宙がつぶれてもいい』は言い過ぎじゃ。そんな無茶な事、言うたらいかんがぜよ。宇宙が潰れたら元も子も、なかやる。」

と、宙公もタツちゃんの極端な言葉に、スエンと同じく諫め始めた。雨は一層強くなって行った。

「ううううぬぬぬぬ。ゆ、許さん。お主には、いますぐここで、救世主となつてもらおうぞ！ 問答無用じゃ！」

スエンの怒りは爆発して、あたりは一気に豪雨になった。それはまさにスアミー一族すべての怒りが空間に現れた結果だった。

「宇宙の破滅を願うなど、あつてはならぬこと。お主とはもう話合、浴びるが良い！」

そう言うが早い、スエンは、空中のタツちゃんに向かって、身体の中から金色の大きな光を放った。

タツちゃんの意識は遠のいた。

■ 13

そこは十数年前、まだタツちゃんが子供だった頃の、札幌の大通公園だった。美幌から札幌まで出てきた時の思い出だ。タツちゃんの横には、まだもう少し若かった時のばあちゃんがいる。開拓時代より前から残された大銀杏の木の横で、ばあちゃんが手招きしている。

「秀坊や、こつちへおいで。」ばあちゃんの目は限りなく優しい。

「おまえの名前はね、美幌の美から一文字もらって秀美なんだよ。いい名前だろ？」

ばあちゃんが繰り返していた言葉がよみがえる。

小学生のタツちゃんは、大好きなばあちゃんの方へと走り寄って

た。

と、その時、イチヨウの木のうちと上に、「虚無の闇」が迫ってきていた。

急速なスピードで、「虚無の闇」は、巨木のとつぺんに舞い降りる。スアミイ星で見た、あの恐怖がタツちゃん心の心をまた巢食つていた。

「ばあちゃんを助けなきゃ」  
そう思っているのに、目はばあちゃんを見たまま、足は後ずさりしていた。

イチヨウの木は、虚無の闇に飲み込まれて行く。そして、ばあちゃんも、虚無の闇に飲み込まれ、悲痛な表情で、タツちゃんに助けを求めていた。

「ばあちゃんが飲み込まれた」

それは、またタツちゃんにとつてたまらない恐怖だった。

ばあちゃんのもとに駆けつけようと思っっているのに、体は反対側を向き、大急ぎで、巨木から走って逃げてしまう。

「ばあちゃんごめんよ。ばあちゃんごめんよ。」何度も謝りながら、それでもタツちゃんは無意識に走って逃げていた。まるで誰かにあやつられていくかのようなだった。

虚無の闇は、タツちゃんを追いかけようようにどんだん迫ってきていた。恐怖がタツちゃんを捉えて離さず、とにかく必死に走る事しか考えられない。

無我夢中で走っていると、体はとんでもない高速で移動していて、いつの間にか空中を飛んでいた。宙公に支えられているわけでもないのに。

タツちゃんは海を越えて本州に入り、十和田湖を見降ろし、信州の山岳地帯を越えていた。虚無の闇は、タツちゃんが逃げる速度を今にも上回りそうだった。いまにも追いつかれるかも知れない。タツちゃんには必死でスピードを上げる。

大阪で宙公と一緒に入った居酒屋の親父が店の前で虚無の闇に飲み込まれた。大阪湾では、リヒテンが悲しげな鳴き声とともに虚無の闇の餌食になった。薄ぼけたアパートで、アラシさんも闇の中へと消えてしまった。

タツちゃんは瀬戸内の海を高速に飛び抜けて行く。逃げなければ。知らず知らずに来産大の方向へと逃げていた自分に気付く。でも、だからどうだというのだ。虚無の闇は、相手が誰であろう



た。という、とんでもない大声をタツちゃんは、体の底から絞り出した。

■ 14

「なんちゆうこと、するんかばい！」

宙公はスエンに向かって叫んだ。金色の御光を浴びて、タツちゃんは意識を失っていた。その身体は、金色の光につつまれ、ゆるやかに明滅を繰り返していた。

タツちゃんの体の変化をじっと観察していたスエンは、宙公をチラリと見ると、ふたたびタツちゃんの体に目を戻し、宙公に言った。

「スアミイ10億年、阿頼耶識の記憶の通りなら、救世主は、我々スアミイのハーレン波を浴びれば、その体は金色に輝き、大きな光となつて、宇宙に向かって爆発するはずじゃ。その救いの光は圧倒的スピードで宇宙に広がり、虚無の闇は光に打ち払われると言われている。ユルイスナのものよ、これで我々が懸念して来た宇宙の終わりも、完全に防げる。長い苦しみが終わるのじゃ。お主の監察官としての役割も終わりじゃ。この者の体は、徐々に輝きを増し、救世主へと変貌を遂げて行くはず。我々宇宙種族すべてが、安心して暮らせる日が、やつとやってきたのじゃ。監察官としてのお主らの新人類探しの旅もこれで終わるのじゃ、喜ぶが良いぞ。この宇宙の消滅を防ぐこと。その目的はお主も変わるまい。この者の変化をお主も見守るが良いぞ。」

そう言われた宙公は返す言葉もなく、ただタツちゃんの体を見ているしかなかった。

と、その時、タツちゃんが、

「うわあああああああああああああ」

と体中から振り絞るような叫びをあげた。

「な、なんじゃ！」とスエンが驚く。

金色に輝いていたタツちゃんの体は、「大きな光」にはならず、ゆるやかに明滅の速度をゆるめ、そして、やがて光を失っていった。いまやすでに普通の地球人の姿に戻っていた。

タツちゃんが目を覚ますと、目の前には、スエンの姿が見えた。

「ん？ 僕どうしたの？」とタツちゃんはスエンに聞いた。

「ど、ど、ど、どうしたのじゃ」

呆然とした顔で、スエンも同じ事をタツちゃんに聞き返していた。

「どうして、どうして、お主は、金色に輝かぬ？ 光の元となつて宇宙に広がらぬ！ どうしてお主は、救世主となつて、虚無の闇を打ち払わぬのじゃ！ どういう事じゃ！」

伝説の手順との、あまりの食い違いの大きさにスエンは半狂乱のようにタツちゃんを質問攻めにしていた。

「どうなってるの、これ？　ね、宙公。」わけがわからず、タツちゃんには宙公に聞いた。

「ああ、いや。どういう事じゃろう？　スエン様が、タツちゃんの洗脳に失敗した、という事なんじゃなかるうかばいね。」

「え？　そうなの？」

雨は、まだ止まらずにいた。

■  
15

豪雨の中で、タツちゃんはスエンに言う。

「ねえ、スエン。多分僕は救世主とかなんとかじゃないと思うんだ。単なる普通の地球人なんだよ。」

スエンは予言が実現されなかった事に打ちひしがれているようだった。それはそのままスアミイ一族の大きな落胆を表していた。

「でもさ、僕はスアミイのみんなが助かる道はあると思うよ。」

「：な、なんじゃと？」

「何を言うのかばい」

宇宙人二人がともにタツちゃんの言葉に驚いた。

「あのさ、あれだけ宇宙空間を掘り進めるなら、宇宙のあらゆる場所に、スアミイみんなが移り住んだらいいんだよ。」

「な、なんじゃと？」

「スアミイのみんなが、あんなに必死に穴を掘ってるのは、スアミイ星を失くしたくないからでしょ？」

「当たり前じゃ。」

「でも、消えちゃうなら、もう、いいじゃん。無いなら無いで。」

「な、何をとんでもない事を。」

スエンの顔が困惑で翻弄され、怒っているのか、驚いているのか解らない表情になって来た。

「母星がなくなるんなら、それはそれで仕方ないよ。台風が来た時に、台風を止めたりしないでしょ？」

「いや、タツちゃん、台風くらいなら宇宙の進んだ科学では充分弱める事は可能ですばい。」

と、宙公が訂正を入れる。

「でも、『虚無の闇』は無理なんでしょ？　なら諦めるしかないじゃん。」

「な、何を気軽に『諦める』などと申すか。この世界すべてが消滅してしまうのじゃぞ、それでも良いのか。」

とスエンが畳み掛けるように問題点を指摘する。

「うーん、それがこの宇宙の運命なんだとしたら、それは受けいれるしかないんじゃないの？」

「う。運命と申すか…。」

スエンは下を向き、じっと考え始めた。それは一人で考えているのではなく、中心を統べる者として、他の全スアミイたちと話し合っているような深みがあった。長い沈黙があたりを制した。

すでに、雨は止み、黒雲もゆっくりと薄れていった。

長い沈黙の後、スエンはゆっくりと顔を上げた。

「ふむ。地球のものよ。」

「なに。」

「我等種族全員の共通意見を、そなたに伝えよう。」

「うん。」

「『それは気づかんかった。』」

「え？」

「『いままで母星を長らえさせ、宇宙崩壊の防波堤として生きる事こそ、我等が使命と殉じていたが、我らが、我等自身の生きる道を選んでも良いとは、考えもせなんだ。』」

「ああ、そうなの？」

「『母星が失せてしまふは残念じゃが、我等の幸せ、生きる道には変えられぬ。その提案受けさせてもらうぞ。』これが、我等の共通意思じゃ。」

「ああ、そうなんだ。それは良かった。」

と、タツちゃんがホツとした表情に戻った時だった。宙公が突然に叫んだ。

「いやいやいや、いやいやいや、アカン、アカンってタツちゃん。そんな事したら、アカンがな。そんな事したら、宇宙の消滅が早まってしまふんやがな。スアミイ族のハーレンシーがあるからこそ、スアミイ星で、ハーレンシーの一里塚があるからこそ、なんとか、あの辺境の宇宙は崩壊せずに、生きながらえておるがじゃ。この宇宙は消滅を引き延ばせてるんや。スアミイ一族が、あそこから引き揚げてしもたら、それは…。」

「ユルイスナのものよ。」

と、スエンが宙公に向かって話しかけた。

「宇宙救世主伝説は、たったいま崩壊したのじゃ。このものは救世主にはなれぬ。我々の未来への希望は、元々救世主伝説ありきではなかつたのか？ それらが崩壊したいま、判断は次の段階に移っておるのじゃ。この地球のものが、金色の御光を受けても救世主変態を起こさなかつたのが、すべての答えじゃ。ぬしも監察官として、事態の変化を大王さまに一刻も早く伝えるのが役目と思うが、いかがか。」

スエンの声は、さっきまでの危機に瀕したパニック状態を脱して、

スアミイの中心としての威厳すら備えていた。

「ス、スエン様。あなたは、いや、スアミイ一族は、スアミイ星から離脱なさる。それは一族の決定であり、変更は一切ない、という事でござりまするか。」

「その通りじゃ。」

「では、『防波の塚』はどうされるおつもりか。」

「それも、もう意味はあるまい。少なくともスアミイの塚は廃する事になる。それ以外の塚は是非々で考えようぞ。」

「さ、さようでござりまするか。」

「ユルイスナのものよ。」

「何か？」

「あまり時間はあるまい。すぐにも辺境地域の星々へ緊急避難勧告を出さねばならんぞ。お主がとりあえずは動かねばなるまい。役目は重いが、引き受けてくりやりよ。」

「た、確かに……。タツちゃん！ タツちゃんに責任はないけど……。えらいことに、ほんまにえらいことになったがや。もう、すぐにも戻らなならんけん、これでサラバや。もう会う事もないかも知らんけど、みんなにもよろしゅうな。」

「全然話が見えないけど、わかった。とりあえずサヨナラだね。元気でね。」

「ああ、もう行くがや。」

「我等も、種族のものすべてを、この宇宙全体に避難させねばならん。わらわも意識の道を通って、母星へ戻る。さらばじゃ、地球のものよ。」

宙公とスエンは、それぞれ別の方向へと飛び去り、タツちゃんの体はゆっくりと地上に降りて行った。

■ 16

スアミイ達が、掘ることをやめた時、すべての空洞にプラナが走った。スアミイ達を通り抜けてきた、すべての星で、ほんの一瞬、星の上の生き物たちすべてが、とてもたまらなく懐かしい幸せを感じる事ができた。でも、その幸せ感が、スアミイ星の消滅を意味するのを知っているのは、誰ひとりとしていなかった。

スアミイ族の母星の消滅は、宇宙史上、まれに見る美しさだったと言

う。自分たちの人生を生きるために、穴を掘り続けるスアミイ族は、天に輝き星となった。移住する先の星々で、彼らは、キツネ憑きという幻覚として生きていく。誰も彼らの事は知らないが、それぞれの星の

原住民たちは、理不尽なこと、信じられない出来事に出会うたび、「キツネに化かされただけさ」と笑ってやりすごす。そんな賢さが、スアミイ達からのプレゼントだとも知らずに。

そしてスアミイの母星は消えた。その根を失いながらも、輝きながら咲き続けて行く意識の道、宇宙の華は、どんな星より美しかった。